

井関農機が16年ぶりにフルモデルチェンジし、6月に発売した「JAPANTラクタ B.Jシリーズ」。2021年入社の中園（なかぞの）悠佳さん（29）は、新搭載の操作レバーをデザインする大仕事を担った。「自分の『当たり前』が変わっていく楽しさを、このトラクターが教えてくれた」

「究極の機能性」

製品開発を通じ

固定観念気付く



ニーズを調べ、製品の に、やりがいを感じた
コンセプトを立案し、 2年目。新型トラクタ
スケッチを描く。ーデザインの大事な
開発チーム一丸の仕事 やって来た。

“当たり前”打ち破れ

開発期間は約4年。
無段変速の加速・減速
を調整する「マルチフ
ังก์クションレバー」
をイメージして、模
型



▲発売して間もない「JAPANTラクタ B.Jシリーズ」。中園さんは「飽きが来ずに長く使ってもらえるデザイン」と笑顔だ（同）



INTERNATIONAL YEAR OF THE
WOMAN FARMER
2026

った。
同僚はもちろん、他
部署の扉も開け、男女
を問わず、多くの人に
握ってもらった。模型
を何十個も積み上げ、
完成した。「男性も女
性も扱いやすい形で、
どの人にもなじむ」と
胸を張る。

同社の社員は560
人で、うち女性は85人
（6月末時点）。中園
さんは「男女関係なく
チャンスが巡ってくる
会社」と話す。一方、
製品を使う農家の中に
は女性ならではの悩み
がある人もいて、その
声をこれからの開発に
生かしたい。そのため
井関グループ組織横断
型の女性チーム「さな
え倶楽部（くらぶ）」
で活動している。

を作った。開発チーム
の男性に握ってもらう
と「小さくない？」と
言われた。驚いた。
中園さんは「私自身
が考える『握りやすい
サイズ』が当たり前で
はないと気付いた」と
振り返り、「性別も、
体格も、人それぞれ。
どんな農家でも使いや
すいトラクターにする
ため意識が変わった。
レバーの形もスイッチ
の位置も、試行錯誤を
続けた」と話す。

サイズだけではな
い。握る部分の形状は
箱のような形か、パソ
コンのマウスのような
形か。レバーに付ける
スイッチの誤作動を防
ぐには、どこに配置す
るか。課題は山積みだ
る。

（佐野太一）

井関農機 中園悠佳さん



レバーを握り、操作感を確かめる中園さん（愛媛県砥部町）

愛媛県砥部町の事務
所で、デザイン業務に
携わっている。顧客の

絵を描くのが大好き
な少女だった。北海道
のサラリーマン家庭で
生まれ育ち、小学校の
工図の時間を楽しみに
していた。大学で製品
デザインを専攻。製品
のコンセプトを決め、
形にする、ものづくり
に引かれた。「機能美
が魅力」と思った農機
のデザインがしたく
で、同社に入った。
実は農業に強く興味
を持ったのは入社後の
こと。「田畑でうちの
農機を見かけると誇ら
しくて」と笑う。製品
の開発初期から量産ま
で一貫して担える仕事
が楽しい。